

君が望む永遠 二次創作
kiminozo novel series 09

君につたえるコトバ
the farewell address

有栖山 葡萄
ALICEYAMA BUDOU

 PARKALICEYAMA

口にするのは恥ずかしい上に、言葉にした瞬間に陳腐に感じてしまう。しかし受け取る側にしてみると、意外と大切であったりするらしい。いくら態度で示してもこの言葉を聞かせてくれないという理由で、世の女たちは相手を切り捨てたりするそうだ。

全くもって理不尽な話だが、そんな言葉ひとつで許してもらえないのならそれはそれでやすいものかもしれない。

その言葉を目の前にいる彼女に初めて使ったのは、一体いつだったろうか。

思い出せないほど古い話ではない。

二人が出会ってから、まだ八年くらいしか経っていない。

ただひとつ言えるとすれば、その時は言葉どおりの意味を持っていたはずだ。伝えたい気持ちに乗せて、その言葉を発していた。それが本物かどうかなんて今となってはわからないし、その頃だつてわかつてなかったのかもしれない。

しかし数年の歳月が経ち、今その言葉を口にするときには自分から発した音だという以外に、何の意味も持ち合わせていないのは確かだった。

相手に伝えたい気持ちなんて、なにもない。

ただ安心を与える為だけに、俺は今日もその言葉を口にする。

「愛してる、×××」

目 Contents 次

4

5

0 3	はじめてのコトバ
0 6	からっぽなコトバ
2 0	せまりくるコトバ
2 8	あたたかなコトバ
3 0	おもいだすコトバ
3 7	おわかれのコトバ
4 2	君につたえるコトバ

「卵子から恋人まで、女性であることの

役割の一切は、待つことにほかならない」

マリー・ボナパルト

「少女コレクション序説（著・澁澤龍彦）」より

家に帰り着いたのは、日も変わって二時を過ぎた頃だった。あたりは寝静まり、聞こえるのは木枯らしに吹かれ鳴いている電線の音くらいなものだ。

玄関前に立ち、鍵を取り出す。

誰か居るような気配はない。いい時間だからもう寝てしまったのか、それとも今日は来ていないのか。

別段メールで連絡をするなんてことは普段からしていない。そのくらい、彼女がここにくる事は当たり前前の事だった。

出来るだけ音を立てないようにして、鍵を開け部屋に入る。

足元には黒のパンプスが一足、玄関と居室をつなぐ扉の隙間からも薄く光が漏れている。

今日も、水月みづきは俺の部屋にきていた。

テレビの音も聞こえず、奥の部屋は静かだった。普通よりはちよつと広いとは言え、所詮ワンルームマンション。起きていれば判るほどに、音は聞こえてくるはずだ。

待ちくたびれて寝てしまったんだろう。そつと扉を開け奥に進む。

灯りのついた部屋、壁際に目を向けると思ったとおりベッドの上に水月は横たわっていた。帰るつもりだったんだろうか、仕事に行くときと同じブラウスとスカートのままだった。

疲れているのだろう。

俺は水月を起こさないように、手にしていた荷物を静かに床に置くと風呂場に向う。シャワーだけなら一時間ほど前にも浴びたが、もう一度石鹸を使って洗いたいし、何よりもお湯につかって身体を温めたい。三月の冷たい風に晒され、身体が凍えていた。

湯船にはお湯が張られ、風呂場には適度な湿気と温かさが充満していた。俺の性格を知っている水月が、用意してくれていたんだろう。お湯につかり冷えた身体を温めると、筋肉が緩みゆつたりとして落ち着いてくる。

しばらくそのままお湯に身を任せばんやりする。時間にして二十分くらい経つただろうか、湯船から上がる。じつとり汗ばむくらいに温まった身体を拭いて、居間にもどる。

風呂を上がって部屋に戻ると、水月は起きていた。コタツに座り、彼女はお茶を飲んでいる。カップは二つ、俺の分も用意してくれているようだった。

「遅かったね、お仕事おつかれさま」

俺の姿を見上げると、水月は笑顔で話し掛けてくる。

「ああただいま。待つてくれたのか？」

髪を拭きながらコタツに入り、お茶に手をつける。

「ん？ 片付け終わって今まで寝てたみたい。だから待つてたつていつたら孝之に悪いかな」

なんて、申し訳なきそうに可愛く照れている。

「そっか。時間、大丈夫なのか？」

「ん？ もうこんな時間だし今夜は泊まって、明日はここから会社に行く」

「ああ、そうしろ」

それはそうだ。いくら歩ける距離だといつても、こんな夜中に帰れる訳がない。泊まっていくのは当たり前だ。

「ねえ、ご飯はどうする？ 支度はしてあるけど」

「いや、遅くなつたし食つてきた」

「そっか、孝之のところ飲食店だしね。食べるものには困らないか。じゃあ冷めてると思うから、冷凍庫にしまつてくるね」

水月は立ち上がると台所に向つた。うちにくると煮物とかまとめて作つて、冷凍したりしている。本当にまめな奴だ。

俺がお茶をひとすずりしている間、台所からは何かを片付ける音が聞こえてくる。

ずるずると続いている半同棲生活。もうこんな生活が六年近く続いている。いいかげんきちんとした形をつけるべきなんだろうと思う。実際そうしようとした時期もあった。

だけど踏み込めなかった。

水月との生活は、俺にとつて大切なものだ。俺が今こうして生活してられるのも、彼女のおかげなんだから。

彼女のことが嫌いなわけではない。だからといって、好きかと尋ねられると、それもそうだとはつきり言い切れない。どち

らつかずの生活を続けていくうちに、感情はとらえどころのないものとなつていた。

緩慢な感情の薄れは、惰性となつて大きな変化を避けるようになっていった。それは水月とこのまま結婚するという事すらも決められずにいた。

それに。

この数ヶ月の出来事が、俺の判断を更に鈍らせていた。

どうしてこんな事になつてしまったのか、理由は単純だった。その理由を話したなら、誰もが俺を批難する事だろう。そのくらいの事は判っている。

だけど、仕方のない事だった。

おれたちの事を知っている人間ならどうして仕方ないのか、その理由を深く聞く必要はないだろう。

年明けのある日、偶然足を運んだあの場所での再会がもたらしたものを知れば誰もが悩んだ事だろう。

今更悩む必要なんてないじゃないかという奴がいるなら、そいつは本当に人を好きになつた事なんてないのだろう。

眠つていた感情がかき乱されるのを、俺は抑える事が出来なかつた。

俺と遙はるかはいま、男と女の関係にあつた。

